生かしたい日本が持つ文化的資源

イスラエルのガザ侵攻は凄まじい。ハマスをせん滅させるまで攻撃が止むことはないのであろうか、巻き添えを食って多くの市民の命が奪われている▼こうした事態を見て感じる一つは一神教の非妥協性で、基本的に自らの神以外の神は邪神であり、邪神を信じる者は敵でしかなく、共生を難しくする。植民地、奴隷を生み出してきた背景には、こうした一神教の世界がある▼旧石器時代は洋の東西にかかわらずアニミズムであったものが、新石器時代に入ると一神教が生み出され、アニミズムを席巻してきた。旧石器時代と新石器時代とを区分する基準として重視されてきたのが農耕の発生だ。この農耕が開始されることにより、貯蔵可能な穀物を栽培することによって剰余価値を生み出すことが可能となった。これにともない分配の格差から身分格差を発生させ、また国家の成立につながったともされる▼日本は多神教というか、アニミズム、自然信仰を大事にしてきた特異な存在といえる。新石器時代へと世界が移行する頃、日本では土器が作られるようになりながらも、狩猟・採集・漁撈を主とし、クリ、アワ、ヒエ等を若干の管理にとどめる「半農耕」「半栽培」を１万年余にわたって継続してきた。縄文晩期になって朝鮮半島から水田稲作が伝播することにより、本格的な農耕が弥生時代に成立した▼縄文時代を新石器時代とみなすかどうは学会での大きな論争点でもあるが、それはともかく１万年余の間「農耕」はせずにあえて「半農耕」にとどめ、狩猟・採集・漁撈を主とする選択をしてきた縄文人の認識と、そのベースにある自然信仰を再確認していくことはきわめて重要だ。これを踏まえて日本の独自性を現代に生かしていくことが、世界平和、国際貢献の大きなポイントになるのではないか。

（土着菌）